

高校生における強迫性格と5因子論による 性格特性ならびに精神的健康について

大久保 純一郎
(帝塚山大学心理学部)

Mental Health, General Personality traits and Obsessive-Compulsive Personality in High School Students.

Junichiro Okubo

Objectives:

The purpose of this study was to investigate relationship between mental health, personality traits and obsessive-compulsive symptoms in high school students.

Methods:

Participants were 155 high school students, who have completed Obsessive-Compulsive Personality Scale (OCPS: Sekiyama, 2008), General Health Questionnaire Japanese 12 items version (GHQ12, Nakagawa & Daibo, 1885) and Big Five Personality Inventory (BFPI: Mizuno, 2005).

Results:

Female Students were mentally less healthy and, more obsessive and compulsive than male students. Students who study at high school with credit system were mentally less healthy than students who study at general high school. Correlation analyses revealed that seeking-perfection-factor of OCPS was significantly correlated with agreeableness and conscientiousness of BFPI; selfish-mind-factor of OCPS was significantly negatively correlated with agreeableness; conscience-factor of OCPS was significantly correlated with agreeableness and neuroticism; undecidedness-factor of OCPS was significantly correlated with neuroticism and GHQ12. Multiple regression analyses revealed that type of school, seeking-perfection, and undecidedness of OCPS were significantly associated with higher GHQ12 scores.

Conclusion:

This study suggested that 1) seeking-perfection of OCPS was associated with higher mental health, 2) undecidedness of OCPS was associated with lower mental health, 3) students in school with credit-system were mentally less healthy, but not differ in personality trait.

現代は、こころの時代と言われるように、こころの健康や問題に対する関心が高まっている。思春期青年期にある中学生、高校生においても、不登校をはじめ、いじめ、校内暴力、摂食障害、薬物乱用、さまざまな非行、あるいは無気力などの精神保健上の問題行動が続出している。中学生、高校生にみられる精神的な適応問題の背景には、青年期に特有の精神的不安定さに加えて家庭や学校における日常生活上の社会・心理的ストレスがあると考えられる。したがって、不適応に落ちいることは、特定の生徒の問題ではなく、中学生、高校生全般に当てはまる問題でもある。そこで、まだ問題の起きていない生徒の、ストレスやこころの状態、行動を詳しく調査・分析し、それらの結果をふまえ、学校現場において具体的な対応の仕方を検討する必要がある。

大久保ら（2004）は、中学生の心身の健康度、ストレスの程度、ソーシャル・サポートの量、ストレス対処のパターンについて質問紙調査を行い、精神的な障害があるとはいえないが、健康ともいえない“半健康状態”の生徒がきわめて多いことがわかった。また、大阪府教育センターにおける来所での教育相談利用件数の1999年度統計によると、不登校や神経症傾向（不適応や不安性障害、身体表現性障害、強迫性障害など）が問題の中心であった（北村，1999）。また、飯田ら（1993）は奈良県立医大精神科児童思春期外来を受診した不登校児の初診時診断をまとめているが、強迫性障害は不登校児の精神科診断の4.4%であり、他の精神疾患と比較して無視することのできない数である。また、強迫性障害の診断に至らないまでも、不登校事例において、強迫的症状は頻繁に見られる（斎藤，1995）。したがって、不登校をはじめ思春期のこころの問題について検討する場合に、強迫性障害や強迫性症状は重要な要因の一つであるといえる。

強迫性障害（Obsessive-Compulsive Disorder：OCD）は、強迫観念と

強迫行為によって特徴づけられる不安性障害の一種である。1960年代には、まれな疾患（発症率は、0.05%）と考えられていたが、1988年の米国 National Institute of Mental Health による Epidemiologic Catchment Area (ECA) 研究では生涯有病率は2.5%で地域差はないことが示された（竹内, 1998）。また、青年期の頻度では、高校生の0.6%が診断されたとする報告や、16-17歳で3.6%と診断した報告がある（Flament et al., 1988）。さらに、子どもの有病率は1～5%という疫学調査（Yaryula-Tobias & Neziroglu, 1997）がある。また、成人期の OCD の30-50%は、子ども、青年期に強迫エピソードがある（Flament & Cohen, 2002）。したがって、OCD は、有病率において感情障害や社会不安障害について主要な精神障害であるばかりでなく、思春期青年期での対応の重要性の高い障害でもある。さらに、発達障害との併存も高率に見られ、思春期青年期のこころの問題について検討する場合、OCD ならびに強迫的症状は、重要な要因の一つであろうと考えられる。

大久保 (2013) は、Maudsley Obsessional Compulsive Inventory (MOCI, Hodgson & Rachman, 1977) の邦訳版を用いて、中学生の強迫的症状と全般的なメンタルヘルスとの関連性について検討した。強迫症状とストレス反応には有意な相関が見られ、ストレスorヤorストレス・コーピングの種類によって、関連する強迫的症状の異なることが示された。しかしながら、MOCI は、強迫性障害の症状の中でも、強迫行為に偏った構成であり強迫的傾向とメンタルヘルスの十分な検討が出来たとは言えない。

他方、Salzman (1973) は、強迫的傾向を性格特性の一部としてとらえ、健全な領域から治療を必要とするほどの不適応を示す病的な領域まで含む“強迫性格”としてとらえなおし、それを“強迫スペクトル”と名づけた。そこで、関山 (2008) は、強迫性格を測定する尺度を構成するとともに、高校生における強迫性格とメンタルヘルスの関係性について検討した。その結果、強迫性格はストレス反応を高めること、さらに強迫性格の側面によってその影響は異なり、“わがまま”と“優柔不断”がストレス反応と結びつくことが見いだされた。

そこで、本研究では、関山 (2008) と同様、OCD 発症には至らない状態における強迫的症状として強迫性格をとらえ、高校生を対象として、強迫性

格と、その他の一般的な性格特性ならびに、メンタルヘルスとの関連性について検討することを目的として質問紙調査を行った。

方 法

調査対象者

近畿圏の高等学校に在学する生徒155名（男子81名、女子74名）を対象とした。その内、106名は普通高校で、49名は単位制高校の生徒であった。

質問紙

質問紙は、次の心理検査から構成された。

強迫性格に関する質問紙：関山（2008）による強迫性格尺度を用いた。本尺度は20項目から構成された。各項目に対して、“まったくあてはまらない（1点）”から“とてもよくあてはまる（6点）”の6段階評定方式で回答を求めた。また、本尺度は、“完全追求”、“わがまま”、“良心性”、ならびに“優柔不断”の4下位尺度から構成される。得点は、各下位尺度得点と合計得点を算出する。

性格特性に関する質問紙：水野（2004）の5因子論性格検査を用いた。本尺度は、20項目から構成された。回答方法は、「非常にあてはまる（5）」から「まったくあてはまらない（1）」の5件法である。また、外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性、および洗練性（知性）の5下位尺度から構成される。得点は、各下位尺度得点を算出する。

心の不健康に関する質問紙：日本版 GHQ 精神健康調査票12項目短縮版（General Health Questionnaire, GHQ12：中川・大坊，1985）を用いた。GHQ12は、日本版 GHQ 精神健康調査票（中川・大坊，1981）を改訂し、12項目に短縮したものである。採点は、0-0-1-1点法を用いた。評定基準として統一されたものではないが、本田ら（2001）は4点以上で精神健康状態に問題を持つ可能性があると述べている。

手続き

各学校において、大学の心理学に関する模擬講義を行い、その体験学習の

ひとつとして質問紙調査を実施した。

倫理的な配慮：調査前に、調査内容、個人情報やプライバシーの保護について説明した。また、質問紙は無記名で行ったため、個人情報は保護されていると考えられた。

結 果

各尺度の得点について

表1に5因子論性格検査、強迫性格尺度の各下位尺度とGHQ精神健康調査票12項目版(GHQ12)の平均値と標準偏差を、性別、学校種別(普通高校、単位制高校)、に示した。また、それらのデータについて、性別(2水準)と学校種別(2水準)の2要因の分散分析を行った(結果は、表1に示した)。

表1 各尺度の性別、学校種別のクロス集計と分散分析結果

(周辺度数は太字で示した)

検査	性別 学校種 尺度\人数	分散分析結果 (F値)									主効果		
		女子			男子			総和			性別	学校種	交互作用
		普通 高校	単位制 高校	総和	普通 高校	単位制 高校	総和	普通 高校	単位制 高校	総和			
5因子論性格 検査	外向性	11.13	10.85	11.03	10.83	9.36	10.43	10.96	10.18	10.72	2.43	2.31	1.08
	協調性	11.79	11.11	11.54	12.07	11.68	11.96	11.94	11.37	11.76	0.87	1.36	0.10
	勤勉性	9.64	11.07	10.16	11.20	11.36	11.25	10.51	11.20	10.73	4.33*	3.21+	2.05
	情緒安定性	9.57	8.26	9.09	11.37	10.05	11.01	10.58	9.06	10.10	12.15**	6.60*	0.00
	開放性	10.32	10.30	10.31	11.80	11.00	11.58	11.14	10.61	10.97	5.85*	0.83	0.74
強迫性格尺度	完全追求	18.28	19.59	18.76	18.76	18.91	18.80	18.55	19.29	18.78	0.02	0.96	0.62
	わがまま	17.81	18.85	18.19	15.75	16.45	15.94	16.66	17.78	17.01	9.15**	1.41	0.05
	良心性	20.43	22.56	21.20	19.78	19.55	19.72	20.07	21.20	20.43	4.27*	1.15	1.79
	優柔不断	19.81	21.04	20.26	18.75	19.09	18.84	19.22	20.16	19.52	3.43*	0.94	0.30
合計	76.32	82.04	78.41	73.03	74.00	73.30	74.49	78.43	75.74	8.33**	2.90+	1.47	
心の不健康 (GHQ12)	4.58	6.15	5.23	3.31	4.68	3.72	3.84	5.49	4.42	6.75**	7.80**	0.03	

+, $p < .10$; *, $p < .05$; **, $p < .01$

性差について 分散分析の結果、5因子論性格検査の下位尺度では、勤勉性 ($F(1, 151) = 4.33, p < .05$)、情緒安定性 ($F(1, 151) = 12.15, p < .01$)、ならびに開放性 ($F(1, 151) = 5.85, p < .05$) において、女子より男子の得点が有意に高いことが示された。強迫性格検査では、わがまま ($F(1, 151) = 9.15, p < .01$)、良心性 ($F(1, 151) = 4.27, p < .05$)、優柔不断

($F(1, 151) = 3.43, p < .05$)、合計点 ($F(1, 151) = 8.33, p < .01$)、ならびに GHQ12 得点 ($F(1, 151) = 6.75, p < .01$) において女子が男子よりも得点が有意に高いことが示された。

学校種の差について 分散分析の結果、5 因子論性格検査の下位尺度では、勤勉性 ($F(1, 151) = 3.21, p < .10$) において単位制高校の生徒の方が普通高校の生徒より有意に高い傾向のあることが示された。また、普通高校の生徒の方が単位制高校の生徒より情緒安定性 ($F(1, 151) = 6.60, p < .05$) の高いことが見いだされた。強迫性格検査では、合計点 ($F(1, 151) = 2.90, p < .10$) においてのみ有意な傾向が見られ、単位制高校の生徒の方が普通高校より強迫傾向が高い傾向のあることが見いだされた。GHQ12 得点 ($F(1, 151) = 7.80, p < .01$) では、単位制高校の生徒が普通高校の生徒より心の不健康度が高いことが見いだされた。

尺度間の相関係数

表 2 に、普通高校の生徒 106 名における、強迫性格尺度と 5 因子論性格検査ならびに GHQ12 との相関係数を示した。完全追求は、勤勉性 ($r = .453, p < .01$) ならびに協調性 ($r = .263, p < .01$) と有意な相関が、良心性は協調性 ($r = .238, p < .05$) と有意な相関が、優柔不断は情緒的安定性 ($r = -.277, p < .01$) と有意な負の相関が、GHQ12 ($r = .309, p < .01$) とは有意な正の相関が、強迫性格合計得点は情緒的安定性 ($r = -.216, p < .05$) と有意な負の相関がそれぞれみられた。

表 2 強迫性格尺度と 5 因子論性格検査ならびに心の不健康との相関係数
(普通高校)

強迫性格尺度	5 因子論性格検査					心の不健康 (GHQ12)
	外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	開放性	
完全追求	.033	.263**	.453**	.081	.062	-.069
わがまま	.028	-.127	-.142	-.166	-.126	-.012
良心性	-.017	.238*	.168	-.154	-.131	.109
優柔不断	-.067	-.011	-.015	-.277**	-.112	.309**
合計	-.012	.149	.174	-.216*	-.131	.147

**相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

*相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

表3に、単位制高校の生徒49名における相関係数を示した。完全追求は、協調性 ($r=.477, p<.01$)、勤勉性 ($r=.455, p<.01$) ならびに開放性 ($r=.331, p<.05$) と有意な相関が、わがままは協調性 ($r=-.331, p<.05$) と有意な負の相関が、良心性は協調性 ($r=.327, p<.05$) と有意な相関、情緒的安定性 ($r=-.356, p<.05$) と有意な負の相関が、優柔不断は情緒的安定性 ($r=-.463, p<.01$) と有意な負の相関がそれぞれみられた。強迫性格合計得点は情緒的安定性 ($r=-.387, p<.01$) と有意な負の相関がそれぞれみられた。

表3 強迫性格尺度と5因子論性格検査ならびに心の不健康との相関係数
(単位制高校)

強迫性格尺度	5因子論性格検査					心の不健康 (GHQ12)
	外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	開放性	
完全追求	0.093	.455**	.477**	0.114	.331*	-0.105
わがまま	-0.096	-.331*	-0.147	-0.244	-0.215	0.197
良心性	0.02	.329*	0.094	-.356*	-0.239	0.232
優柔不断	-0.046	0.022	-0.16	-.463**	-0.059	0.14
合計	-0.01	0.207	0.114	-.387**	-0.065	0.185

**相関係数は1%水準で有意 (両側)

*相関係数は5%水準で有意 (両側)

こころの不健康度 (GHQ12) を目的変数とした重回帰分析

こころの不健康度 (GHQ12) を目的変数とした階層的重回帰分析を行った。説明変数は、第1段階で性別、学年、ならびに学校種を投入し (モデル1)、第2段階で強迫性格の4下位尺度を投入した (モデル2) (表4)。モデル2の決定係数は.19と高くはないものの、その変化は有意であり ($F(4, 131) = 3.15, p<.05$)、モデルとして有効であると考えられた。次

表4 こころの不健康度を目的変数とした重回帰分析の結果

	(定数)	モデル1	モデル2
		β 係数	β 係数
ID情報	性別	-0.217**	-0.157 ⁺
	学年	0.013	0.083
	学校種	0.231**	0.245**
強迫性格	完全追求		-0.199*
	わがまま		-0.052
	良心性		0.117
	優柔不断		0.257**
決定係数		0.112	0.19

**1%水準で有意 (両側)

*5%水準で有意 (両側)

⁺10%水準で有意傾向 (両側)

に、目的変数に対する効果の指標である標準偏回帰係数（ β 係数）の検討を行った。精神的不健康度に関して、学校種（ $\beta = .245, p < .01$ ）、完全追求（ $\beta = -.199, p < .05$ ）、優柔不断（ $\beta = .257, p < .01$ ）が有意な効果を持つことが示された。

考 察

普通高校と単位制高校の生徒を対象として、強迫性格尺度、5因子論性格検査、ならびに GHQ 精神健康調査票12項目版（GHQ12）を実施した。

性差について

5因子論性格検査では、男子の方が勤勉性、情緒安定性、開放性が高く、性格特性としては適応的な傾向のあることが示された。強迫性格尺度においては、女子の方がわがまま、良心性、優柔不断の得点が高く、適応不適応にかかわらず強迫傾向の高いことが示された。また、GHQ12によるところの不健康度は、女子の方が高いことが示された。一般的に男子よりも女子の方がストレスが強く、メンタルヘルスに問題のあることが示されている（e.g. 大久保, 2005）が、今回の調査においても同様の結果が得られたと言える。

学校種による相違について

学校種による差は多く見られなかったが、単位制高校の生徒の方が普通高校の生徒より、情緒安定性が低く、GHQ12得点が高く、全般的メンタルヘルスの問題が示唆された。単位制高校は全ての生徒ではないものの不登校等の学校不適応の経験者が多いと考えられ、それらの経験の有無がメンタルヘルスにネガティブな影響を及ぼしていると考えられる。しかしながら、強迫性格の相違は見られなかった。

心の不健康度に影響をおよぼす要因について

強迫性各尺度等の相関係数による分析では、優柔不断が心の不健康に有意な影響をおよぼしていると考えられる。相関係数だけでは交絡変数等の評価が十分にできないため、重回帰分析を行ったところ、学校種では単位制高校

の生徒の方が心の不健康度が高く、強迫性格では優柔不断の高いものが心の不健康度が高く、完全追求が高いものが心の不健康度が低い傾向が見られた。

単位制高校の生徒は、メンタルヘルスの面でネガティブな状態にあることは確かであるが、性格的な相違は見られなかった。また、学校種にかかわらず、強迫性格の一部がメンタルヘルスに影響をおよぼしていると考えられる。

強迫性格と5因子論性格検査の結果について

強迫性格の中で、完全追求と良心性は、協調性、勤勉性と有意な正の相関を示し、適応的な傾向を示していると言える。また、わがまは協調性と負の相関を示し、優柔不断は情緒安定性と負の相関を示すなど、不適応的な傾向を示していると言える。

まとめ

強迫性格は、心の不健康や不適応と関係しているが、全ての因子がネガティブな影響を示すのではなく、強迫性格の一部が不適応的であり、因子によっては、適応的な傾向も強いと言える。つまり、強迫性格の中でも、完全追求、良心性は適応的な傾向を持ち、わがままと優柔不断が不適応的な傾向を持つと考えることができる。これらの結果は関山（2008）と一致している。しかしながら、心の不健康度の予測について分析した結果、それに関与する因子は完全追求と優柔不断だけであった。また、メンタルヘルスのに多少ネガティブな状態にある単位制高校生の場合、良心性と情緒安定性に負の相関が見られるなど、層によって性格特性とメンタルヘルスの関係は異なっているかもしれない。

今回の調査では、強迫性格の優柔不断因子がメンタルヘルスにネガティブな影響をおよぼすが、完全追求はむしろポジティブに働くことが見いだされた。完璧主義などに代表される完全主義的な考えは、メンタルヘルスにネガティブに働くと考えられる（桜井・大谷，1997）が、強迫性格における完全追求は異なった働きをしていると考えられる。今後、これらの点について検討を加えることが望まれる。

文献

- Flament, M. F., & Cohen, D. (2002). Child and adolescent obsessive-compulsive disorder: A review. In Maj M., Sartorius, N., Okasha, A. Zohar, J. (Eds) *Obsessive-compulsive disorder 2nd Edition*, Wiley & Sons.
- Flament, M. F., Whitaker, A., Rapoport, J. L. Davies, M., Berg, C. Z., Kalikow, K., Sceery, W., & Shaffer, D. (1988). Obsessive compulsive disorder in adolescent: An epidemiological study. *Journal of American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **27**, 764-771.
- Hodgson, R. J. & Rachman, S. (1977). Obsessional-compulsive. *Behaviour Research and Therapy*, **15**, 289-395.
- 本田純久・柴田義貞・中根允文 (2001). GHQ-12項目質問紙を用いた精神医学的障害のスクリーニング 厚生指標, **48**, 5-10.
- 北村陽英 (1999). 心の健康問題と学校保健の課題 学校保健研究, **41**, 410-414.
- 水野邦夫 (2005). 簡便な性格測定尺度の作成について: 性格の5因子モデルをもとに 聖泉論叢, **13**, 13-23.
- 中川秦彬・大坊郁夫 (1985). 日本版 GHQ 精神健康調査票手引き, 日本文化科学社.
- 大久保純一郎 (2005). 中学生の精神保健に関する実態調査研究 (2): ソーシャルサポートのストレス軽減効果について 帝塚山大学心理福祉学部紀要, **1**, 41-50.
- 大久保純一郎 (2013). 中学生のメンタルヘルスと強迫的心性について 同志社大学教職課程年報, **3**, 43-53.
- 大久保純一郎・西裕之・平間博之・大島吉晴・葉賀弘 (2003). 中学生の精神保健に関する実態調査研究 日本心理学会第67回大会発表論文集, **8**.
- 齊藤万比古 (1995). 登校拒否の病態について (第870回千葉医学会例会・第10回千葉精神科集談会) 千葉医学雑誌, **71**, 83.
- 桜井茂男・大谷佳子 (1997). “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, **68**, 179-186.

Salzman, L. (1973). *The Obsessive Personality*. (成田善弘・笠原嘉 (訳)
強迫パーソナリティ, みすず書房).

関山徹 (2008). 高校生における強迫性格と精神的健康 鹿児島大学教育学
部教育実践研究紀要, **18**, 163-173.

竹内直樹 (1998). 強迫性障害 松下正明 (総編集) 現代児童青年期精神医
学 (臨床精神医学講座11), 中山書店.

Yaryula-Tobias, J. A., & Neziroglu, F. A. (1997). *Obsessive-
Compulsive Disorder Spectrum*. American Psychiatric Press.

(2015年9月17日査読済)